

☆ 子ども会 (学習会) だより ☆

MY SKY 第3号

マイ スカイ

1996年4月30日火曜日発行(毎週火曜日定期発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責: 吉成士

さくばん わ や めずら おとす ねむ け
 昨晚我が家に珍しいお客さんが訪れました。眠気からうつらうつらと起き出したとき、
 お客さんは窓際にいました。はじめは「何だろう?」と、薄暗い部屋の中で目を凝らして
 見つめてみたのですが、はっきりしませんでした。ひものようであり、長〜い枯れ草のよ
 うであり、ヘビのようでもあり……。でも、新築の、しかも2階の、窓も開けていなかった
 部屋にヘビがいるとは思えません。とりあえず部屋の電気をつけてみました。背筋がゾ
 ゾツとしました。なんと1m以上もある、やはりヘビなのです。動物園以外でヘビを見た
 のは久しぶりです。しかもこんなに大きなヘビを間近で見た記憶は、あまりありません。

さて、どうしたものか……。はたとヘビとにらめっこをしながら考えたのですが、とり
 あえず1階にいた父を呼ぶことにしました。父も久しぶりに見たらしく、躍起になってヘ
 ビよりも長い棒を持ち出し、部屋へと勇んでいきました。私もそうですが、母も気味が悪
 いらしく、見には来ませんが「殺されんでよ!」と私と父に言ってきました。

結局、私はアシスタントとして父がヘビを屋外に放り出すのを手助けするだけでした。

いつの間に、どこから、どうやって私の部屋に入ってきたのかはわかりませんが、この
 事件をきっかけに、父が、子どもの頃のヘビにまつわる話をいろいろとしてくれました。

それとは別に、考えさせられたのが「ヘビは殺してはいけない」ということです。よく
 言いますね。「ヘビは神様のつかい」とか「ヘビのいる家は火事が起きない」とか。クモ
 について言えば「夜のクモは縁起が悪い」とか「朝のクモは縁起が良い」とか……。どう
 してこんなことが言われるようになったのかわかりませんし、それが本当かどうかもち
 わかりませんが、こういう言い伝えのおかげで、もてはやされたり、いじめられたりされたの
 ではたまりませんね。こんな言い伝えが、他にもあるかもしれません。そしてそれが、私
 たちの予断と偏見につながっているのかもしれない。そんなことも考え、常に科学的・
 論理的に物事を捉えることが大切なのかもしれませんね。

さて、余談はこれくらいにして、早速本題に入っていきますね。



◎フィールドワーク・京都福知山市O地区（3月3日：京都府福知山市）

この3月に縁^{えん}あって、阿部先生と森口先生の3人で、京都福知山市の被差別部落へ行ってきました。その時のことについて少しふれておきたいと思います。

2、3年生のみなさん、江嶋^{えじま}先生を覚えていらっしゃるでしょうか？昨年度板野町に2回来ていただき、お話をしていただきました。その時のことはMY SKYにも載^のせましたが、その中で、ユウスケくんのことを話してくれました。そのユウスケくんが住んでいるところが、今回お邪魔^{じゃま}したところです。その時の話を前2年生にすると「手紙を書きたい！」ということで、手紙を書いて出したら返事が来たので、まずはその手紙を紹^{しょうかい}介することにします。

みなさん、本当にお手紙ありがとう

僕は今、O青年会とEHCという会に入^{せいねんかい}って活動しています。O青年会というのは僕の地域Oの中学生から大学生が集まって話し合う会です。

EHCの会では、福知山市^{ふくちやま}の中の部落の子が集まって、いろいろなところ^{けんしゅう}に研修^{けんしゅう}に行ったり戦争^{せんそう}の恐ろしさや差別^{おそ}の実態^{じつたい}を学びに行っています。

僕が初めて、僕の生まれ育ったOという地域が同和地区だったということを知ったのは、5年生の終わりに親から聞いたのが初めてでした。

6年生の夏に福知山市の同和地区の子どもたちが集まるジュニアリーダーク研修会に参加して、こんなにたくさんの仲間がいることを知りました。そして、僕は6年生の終わりに僕の学校のみんなにこの素晴^{すば}らしい仲間のことを知ってほしくて、僕の地域のことを発表しました。僕は今、仲間づくりに励^{はげ}んでいます。信^{しん}頼^{らい}しあえる仲間づくりです。部落問題は僕にとってはまだまだ難^{むずか}しい問題です。自分の意見がしっかりと見えるよう、今はがんばっています。どこに行っても、ふるさとを誇^{ほこ}りに思っています。みなさんに会える日を楽しみにしています。

この地^ちに着^ついて、いろんな所をフィールドワークさせてもらったのですが、開^あいた口がふさがらないというか、呆然^{ぜん}としてしまいました。

まず、山間^{やまあい}の被差別部落に入る、車1台が通れるほどの道の入口には、古く小さな屠場^{とじょう}（食肉用家畜^{しよくにくようかちく}の解体^{かいたい}処理^{しり}施設^{しせつ}）があります。そして100mくらい進むと右側に、これも古く小さな火葬場^{かそうば}があり、道^{みち}を挟^{はさ}んで左側にはゴミ焼却^{しょうきやくじょう}場があります。これらの道の左手側の山間^{やまあい}の斜面^{しゃめん}には、たくさんのお墓^{はか}がありました。ただし、部落の人々のお墓はないのだそうです。これら人^{ひと}、獣^{けもの}、物^{もの}にわたるすべての最^{さい}終^{しゅう}終^{しゅう}末^{まつ}処理^{しり}施設^{しせつ}が、部落への道々に寄^よせ

集められているのです。

日本人の、無意識の中に植えつけられている「穢れ意識」の集約がここにあると言っていいと思います。そしてその意識が、部落差別への偏見へと結びついているのです。こういった傾向は、この地だけに限らず、日本中の至る所で見られるようです。同じ部落民と呼ばれる立場として、また同じ人間として、こういった状況を、みなさんはどう考えますか？遠い所のこととして見過ごしますか？それとも、こうした状況を考え、自分のこととして怒り、消化し、今の自分の生き方を見つめますか？

いずれにしても、この地の人々は、今ようやく目覚め、動きつつあります。ユウスケも、その闘う仲間の一人です。私たちは彼ら彼女らと共に、すべての人々がキラキラと輝かく生きていける社会を実現するために、共に手を組んでいくべきだと思います。いろんな形でこれからも情報交換をする場面があると思いますので、その時には全校あげて、エールの交換を行いましょう！！

この他にも次のような手紙が届きました。是非とも、返事の手紙を出したいものです。短くてもいいので、多くの返事が集まることを期待しています。返事の手紙は吉成の方で取りまとめて送りますので、みなさん！よろしくお願いします！！

こんにちは、私は鳥取市内江山中学校の生徒で、学習会に行っています。学習会で板野中学校の公開授業のビデオを見て、どうすればみんなが意見を言えるか考えてみました。ビデオを見てみると、生徒一人ひとりが自分の立場を理解して身近な所で話をされていて、私たちにあんな話し合いができたかなと思います。

できれば、公開授業までどういう授業をしてきたのか、公開授業をしてからの生徒さんたちの部落差別、ふるさとに対する理解、興味、考えなど教えてください。できれば先生方の考えも教えてください。うれしいです。

拝啓

陽春の候、貴台におかれましてはますますご清栄のことと拝察申し上げます。

さて、突然お手紙を差し上げて誠に恐縮ですが、折り入って聞いていただきたいことがあり、お願いの筆を執りました。

私は鳥取市江山中学校で同和教育推進教員をしております田中と申します。

一昨年徳島で全同教が開催されましたが、その前日に貴校の全体学習を見せていただきました。その取り組まれている様子に大変感動し、大変驚きでもありました。

「どうして生徒があんなに自分のことが語れるのか」

「私たちの学校でも、あんな授業がやりたい」

そんな思いが私たちの心に強く残りました。

本校へ戻ってから、地区進出学習会で生徒にその時のことを話し、ビデオでその様子を見せたところ、ある生徒が「どうしても板野中学校の先生方や生徒さんから話聞いてみたい」という願いをもちました。

日頃から部落差別がどうすればなくなるか考えている生徒で、ビデオを見てからも毎日私のところへ話に来ていました。その結果、自分の思いを手紙にまとめ、貴校へ送ることを思いついたようです。本当に一方的なお願いとは存じますが、是非ご一読の上ご意見をお聞かせ願えませんでしょうか。

ご多忙中ご迷惑とは存じますが、よろしくお願いいたします。 敬 具

平成八年四月十七日 鳥取市立江山中学校 田中浩史



◎ハッ塚実先生講演会「私の『人間科』授業」(3月9日:愛媛県波方町)

『ここを育てる 私の「人間科」授業』という本は、広島県の公立中学校で理科を教えてきたハッ塚実さんの講義録である。今も各地の学校で教えている。80に上る講義の主題は身近なもので、第一講は教室の「笑い」についてである。

笑うのは楽しいが、これほど恐ろしいものはない、とハッ塚さんは言う。笑いは、差別と隣り合わせて成り立っているからだ。「アッと笑い」は感動の笑い「ドッと笑い」は差別の笑いである。二つをごちゃまぜにして楽しがっていると、教室の中にさげすみの芽がはびこる……。そして、どういう時に笑うかを書き出して笑いの意味を掘り下げている。……略……

朝日新聞「天声人語」

この文章を読んで「あっ知ってる!」と思い出した人もいるでしょう。あの「アッと笑い」「ドッと笑い」のハッ塚実先生の講演会に、この春行ってきたのです。ハッ塚先生のことを知らない人のために、その一端を紹介できる文章を次に記します。

福山市のハッ塚実さんは、30年間、中学校で理科を教えてきた。久美子夫人も教師。家には三人の子供と実さんの母親。88歳で家事もしていた元気な母親だが、ある日に脳こうそくで倒れる。「闇を切り／ひた走り行く／救急の／車に乗れば／声もうせたり」。

